

現代語における「ニシテ」の副詞語尾的用法をめぐって

A Study of Adverbial Usage of *Nishite* in Modern Japanese

松本 秀輔

要 旨

本稿は、助辞「ニシテ」の助動詞的用法について、いわゆる副詞語尾として用いられる「ニシテ」の現代語の中での用法とその広がり、書き言葉コーパスの用例から見ようとしたものである。結果、「副詞+ニシテ」の用例として、「往々ニシテ」、「すでニシテ」、「ようやくニシテ」、「たちまちニシテ」、「当然ニシテ」、「同様ニシテ」、「寡聞ニシテ」が、さらに「短時間を意味する名詞+ニシテ」の型の用例として、「一瞬にして」「一夜にして」などが、「～ながら+ニシテ」の型の用例としては、「生まれながらニシテ」、「居ながらニシテ」、「生きながらニシテ」、「寝ながらニシテ」、「立ちながらニシテ」、「三つながらニシテ」が、また、副詞あるいはナ形容詞に「ニシテ」が後続し、評価成分（文副詞）として働いている興味深い用例としては、「幸いニシテ」、「不幸ニシテ」、「幸運ニシテ」、「不運ニシテ」が、現代語の中に存在していることが確認された。

いずれも、やや古めかしい印象を与える語法であると同時に、「(ニ)シテ」を用いることで、修飾表現がより描写的、説明的になることが観察された。現代語における「ニシテ」の副詞語尾的用法は決して生産的な広がりを持つ用法ではなく、多くは古くからの文語等の影響を色濃く残す固定的な表現と考えられるが、「ニシテ」を伴った形式であるからこそ実現される一定の表現効果を持つことが確認できた。

キーワード

日本語 助詞「ニ」 副詞 評価成分 文副詞

1 はじめに

助辞「ニシテ」には二種あるとされる。『日本文法大辞典』「にして」の項には、

④格助詞または断定の助動詞の「に」に、サ変動詞「す」の連用形「し」、および接続助詞「て」（完了の助動詞「つ」の連用形とする説もある）のついたもの。「に」が格助詞であるものは「にして」全体でも格助詞的に働き、「に」が助動詞であるものは全体でも助動詞的に働く。

とあり、さらにそれぞれの意味を、

- ①格助詞的用法。場所を示し、「……にあって」「……において」の意を表す。
- ②助動詞的用法。「……であって」の意を表す。

と説明する。また、『日本国語大辞典』でも、

- (格助詞「に」に「して」の付いたもの)①場所または時を表わす。…において。…にあって。…で。(用例省略) ②(近代の文語的な用法)…のばあいでも。…でさえも。(用例省略)
- (形容動詞連用形語尾の「に」、断定の助動詞「なり」の連用形「に」に接続助詞的用法の「して」の付いたもの)…で。…であって。…であって、しかも。(用例省略)

のように二項目を立てて説明している。

助動詞的用法の「ニシテ」については、

- (1) 繊細にして華麗な舞
- (2) 簡にして要を得る

といった「Aデアッテ、シカモB」の意を表す用法が現代語においても一定の生産性を保って使用されている。一方、副詞に「ニシテ」が下接した「往々ニシテ」「たちまちニシテ」などのような、いわゆる副詞語尾として現れる「ニシテ」が存在する。この「ニシテ」の用法は、上記の「Aデアッテ、シカモB」の意を表す用法に比べると、いささか固定的で用法の広がりがありすぎは見られないものの、ある程度のまとまりや型をもって現代語においても使用されており、一定の表現パターンを作り上げているもののように思う。また、副詞語尾用法の「ニシテ」は、上記二種の「ニシテ」の意味用法のうち、いずれと捉えるのが適当か、あるいは副詞語尾用法の中でも意味用法がそれぞれ分かれるのかなど、判然としない部分がある。そこで、本稿では、副詞語尾として用いられる「ニシテ」が現代語の中においてどれほど、またどのような用法で現れているのかについて、概観してみることにする。なお、「ニシテ」の用法としての広がりを見るため、対象を語としての副詞に限らず、語句としてそれに近い働きをしているものまでを含め、副詞的用法として拾ってゆくことにしたい。

2 調査の方法

本稿では、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所および文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」プロジェクトの共同開発による、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』を用いた¹。『現代日本語書き言葉均衡コー

パス (BCCWJ)』は、書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などの各ジャンルから無作為にサンプルを抽出し、1億430万語のデータを格納している大規模コーパスである。今回の調査では、そのデータから「ニシテ」を含み副詞的に働く語句の用例を抽出し、そこから、文語体で書かれているものや、誤植その他明らかに間違いと思われるものを手作業で除き、考察の対象とした。なお、これ以下の用例はすべて『現代日本語書き言葉均衡コーパス』よりの引用である。作者、作品名、本文等の表記は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の表記に従い、作品名のうち副題については、特に必要な場合を除き割愛する。

3 副詞+ニシテ

本章では、副詞に「ニシテ」が下接して用いられた例について考察する。

副詞は通常、「ニ」「ト」を伴うか、助辞を伴わず単独で文中に用いられることが多いが、いくつかの副詞においては、「ニシテ」を下接させて用いられる例が見られる。以下、今回の調査で見出すことのできた「副詞+ニシテ」について、それぞれ3～4例ずつ代表的な例を挙げながら、観察してゆくことにする。

3.1 往々ニシテ

調査では、「往々ニシテ」268例が見られた。「往々ゆ」「往々ニ」でも用いられるが、「往々」は45例、「往々ニ」は3例であったことから、通常、「ニシテ」を後続させる形で用いられる語と言ってよいであろう。

- (3) 討論が過熱して冷静さを失うと、血の気の多い人は往々にして相手のペースに乗せられてしまうのである。(舛添要一『時代を勝ち抜く言葉を持つ』)
- (4) この物語の読者は、商人が往々にして豪商で、高官や貴顕たちと交際し、縁を結んでいるのに気付かれたらう。(藤野幸雄『探検家リチャード・バートン』)
- (5) 隣人とはだれか？ 私たちは、往々にして隣に立っている人、隣に座っている人、隣に住んでいる人、すなわち、物理的に近くにいる人と思いがちである。しかし、イエスによるとそうではない。(生田哲『早わかり聖書』)
- (6) 世の中はそう理屈どおり行くものではない。理論的にはそれが正しくても感情がそれを押しのけてしまう場合だって往々にしてあるのだ。いやむしろそのほうが多いであろう。(内藤幸政『日本史の散歩道』)

(5)～(6)に見られるように、「往々ニシテ」は、文末には「～がちだ／場合がある」などを伴うことも多い(波線部分)。ある事態の起こり得る傾向の高さを示す副詞であるためと考えることができる。

また、先にも触れたように「シテ」を伴わない「往々ゆ」「往々ニ」の副詞の形が存在する。それぞれ1例ずつ挙げておく。

- (7) 〈…産経新聞の用字用語のよりどころである『産経ハンドブック』には「『…すべき』『考えるべき』などのように、文を連体形で止めるのは望ましくない」とあって、使わないようにしているが、往々紙面に出てしまうケースがある。〉おっしやる通り産経新聞には往々これがある。(高島俊男『イチレッツランパン破裂して』)
- (8) 傭人の家許から見舞として在所の名物などを持参してくることが往々にあるが、これは受置いて返礼せずともよいものかどうか。(柴田実『石田梅岩』)

「シテ」を伴わない形式での用法が存在する点は、後述する「すでニシテ」「ようやくニシテ」などとも同様であるが、「往々」は他とは違って「往々ニシテ」の形で用いられることが圧倒的に多い点が特徴的である。

3.2 すでニシテ

通常は、「すでニ」の形で用いられることの多い副詞である。今回の調査では、「すでニシテ」は42例が見られた。

- (9) しかし、古本世界のみを培養液としてきたわけではない。出久根の出自来歴それ自体が、すでにして、現実と虚構が交錯する幻想小説風の結構をそなえている。(佐野真一『人を覗にいく』)
- (10) そこには緊張して椅子に腰をのせた男と、なげやりな媚態をとって立つ女との対比がある。性の対比の暗示があり、シーレにとって、生涯のテーマとなったものだ。さらにいえば、女には、すでにして悪の香りが匂ってくる。(池内紀『世紀末の肖像』)
- (11) 小肥りの、親しみやすげな、いかにも“お母さん”という雰囲気の人で、達者な情痴小説を書いて男性読者を悩殺させているようには、とても見えなかった。「小説新潮」によく発表していて、私より一歳年上だが、すでにして手だれのエンターテインメント作家であった。(田辺聖子『i めえ〜る』)
- (12) …託宣が仮面を取ってから行なわれるということは、舞い手自身がもう既にして山の神であるということの意味しているわけで、それ以前の仮面をつけて舞う部分は、託宣をするために、山の神である状態を完全に達成するためのプロセスだというふうに考えられるのです。(外間守善/板谷徹『顕わすボディ/隠すボディ』)

「すでニ」に比べ、「すでニシテ」には多く「てくる」「ている」「である」などを伴い、「状態の継続」が感じられる用例が多い(波線部分)。言い換えれば、「(すでに) 済んだ」こと、すなわち過去の時点において事態が成立したという事実あるいは時期に問題の

みを表すのではなく、「その時点、その段階、その状態において（すでに）ある」こと、すなわちその時点における状態を表すものである。事態の成立の時期が今問題としている時点よりも（予想外に）早い時期である、というのが「すでニ」の表現する意味であるとすれば、「すでニシテ」は、その事態が早く成立し、その状態が今ここにある、と描写的に表現している、そのような点に「すでニ」との違いが読み取れるように思う。例えば(9)の例では、出久根の出自来歴が存在した時点で、それ自体が幻想小説風の結構を備え、その時点、その段階から現在までそれは変わりなく継続している、ということの謂いであると説明できる。

3.3 ようやくニシテ

今回の調査で「ようやくニシテ」は28例が存在した。

- (13) そうやって、廓の細い道を歩いていると、私が、金沢にやってきて、いまここにいるのだという感じが、ようやくにして胸に迫ってくる。(山口瞳『人生論手帖』)
- (14) 昭和天皇の崩御とともに「戦後」という時代観念もまたようやくにして終止を迎えたのだが、戦後の終焉なるものの中心部にはウルトラ・デモクラシーの死がなければならぬ。(西部邁『サンチョ・キホーテの眼』)
- (15) サル・ハヌムと美人ぞろいの侍女たちは、息せききって堆肥のもとにかけより、そのなかに入り込むようにして目当ての品をさがした。侍女たちは、ようやくにして金入れを捜し出して、主人に献じた。(木村尚三郎『歴史を旅する』)
- (16) このまま凋落してしまうかも知れない自分たちの街と商店街、しかし、ようやくにしてと云ったらいいだろうか、二代目や若手経営者によってまちの保守性に一つの楔が打ち込まれようとしている。(望月照彦『都市民俗学』)

これも、多くの場合に「ようやく」のみの形で用いられるが、仮に、「ようやくニシテ」を「ようやく」に入れ替え、

- (13') …いまここにいるのだという感じが、ようやく胸に迫ってくる。
- (14') …時代観念もまたようやく終止を迎えたのだが、…。

としてみると、副詞「ようやく」が後続部分を直接修飾しているのに比べ、「ようやくニシテ」による表現では、より説明的、描写的に修飾しているという違いが読み取れるのではないだろうか。(13)では、「今ここにいるという感じがようやくニシテ、／→／胸に迫ってくる」といったように、「胸に迫ってくる」を修飾する直前、「ニシテ」で一旦叙述が中止する。「シテ」が持つ「…デアッテ」と文を一旦中止させる働きである。(14)では、「……という時代観念もまたようやくニシテ、／→／終止を迎えた……」

のごときである。これにより、副詞「ようやく」単独での用法に比べ、説明的、描写的な表現効果を生む結果となっているのだと考えられる。

3.4 たちまちニシテ

今回の調査では、「たちまちニシテ」は47例が存在した。

- (17) …普通のペタンコ靴をはいて出かけたが…これが思いっきり失敗だった。たちまちにして水びたし。歩くたびにズブズブと音がする。(中野翠『犬がころんだ』)
- (18) ここが腕の見せどころだと、黒牛のすぐ傍まで近づいて脚に縄をかけようとした勢子の一人が、どちらかの牛に角をかけられ、たちまちにして空中に投げ飛ばされた。(鎌田敏夫『新・里見八犬伝』)
- (19) ルターによる宗教改革が始まった年の翌一五一八年には、シュトラスブルクでも教会や修道院の扉にルターの〈九十五か条提題〉が貼り出され、宗教改革の嵐はたちまちにしてこの町でも荒れ狂い始める。(三宅理一『マニエリスム都市』)

「たちまち(ニシテ)」は「ようやく(ニシテ)」と同様、変化とその時間に関わる副詞と言える。「ニシテ」が「たちまち」に後接することで、「たちまち」が意味として持つ時間的な速さを際立たせ、強調した表現へと変化させていると思われる。「たちまち」には(20)のように「たちまちのうちに」といった表現もあるが、これも同様に速さを強調した表現と見られる。

- (20) ついでに他の二台もたのむと、一台はまったくの故障でだめだったが、もう一台はたちまちのうちになってしまった。信じられないほどの技術水準の高さである。(佐藤健『マンダラ探険』)

なお、「たちまちニシテ」は、変化の時間の短さをきわだたせた表現であるという点において、のちに触れる「一瞬ニシテ」「一夜ニシテ」などとも関連するものであると考えられる。

3.5 同様ニシテ

「同様ニシテ」の用例は38例見出せた。ただし、「シテ」に動詞としての意味機能が読み取れる用例も少なくはなく、完全に副詞語尾と言い難いものも見られる。

- (21) かつて、角川春樹氏が・・・双胴カヌー、すなわち、カタマランによって太平洋の横断に臨んだときも、無謀な試みであると批判された。しかし、彼の冒険は、実験考古学上に非常に大きな功績を残したといえる。すなわちエンジンを使わず、帆と櫂だけ

現代語における「ニシテ」の副詞語尾的用法をめぐって（松本 秀輔）

でダブル・カヌーを操縦し、無事に太平洋を横断したのは、古代人もまた同様にして航海が可能だったということを証明しているからである。（茂在寅男『船と古代日本』）

(22) 世界は多言語状態にあり、中国ひとつとってみても漢語はその「国語」ではない。同様にして英語はアメリカの「国語」ではなく、マレー語はシンガポールの「国語」でもない。（加藤秀俊『なんのための日本語』）

(23) 近世初期の技術にとって、安定した橋を架けるのは不可能であったのである。また同様にして北アルプスなど脊梁山脈を間において日本海に流れ込む急流河川でも、ほとんどの川で橋は架けられず、川を渡るのに苦勞した。（松浦茂樹『日本人はどのように国土をつくったか』）

(21) などは、「古代人も角川氏がやったのと同様の方法をとって、……」という意味に理解するのが妥当とも思われ、「同様ニシテ」の「シテ」はスル動詞の意味を残した使い方であると言える。(22) (23) の例では、「同様ニシテ」の「シテ」にスル動詞の働きはほとんどなく、「同様ニ」を「シテ」で強めている用法と見られる。「同様ニシテ」の用例には、両者の区別がつきにくい、中間的な例も多い。

3.6 当然ニシテ

「当然」は、多くの場合副詞「当然 ϕ 」の形で用いられるものである。今回の調査で見られた「当然ニシテ」の例は4例のみであった。現代語においてはあまり使用頻度の高くない用法と考えてよいであろう。

(24) 「補助金の見直し」については、だれのために何の目的で行うのかを考えると、当然にして市民のために市民生活の安定を目的としたものであったと思います。（『市報とおかまち「だんだん」』2008年23号）

(25) 日本企業は、VIEがなかった場合に比べ、値下げ競争を緩和する。米国企業も当然にして追隨して値上げし、結果として、日本市場での全般的価格水準はVIEによって上昇する。（富浦英一『戦略的通商政策の経済学』）

用例を観察すると、これも「ニシテ」で一旦叙述をまとめて中止しつつ、以下へ叙述を続けていくという形をとることにより、「当然 ϕ 、……」の形式よりも強められた表現になり、同時に「当然」の語句の持つ<評価>の意味を際立たせる結果にもなっていると感ぜられる。

3.7 寡聞ニシテ

「寡聞ニシテ」は13例見られた。なお、「寡聞」それ自体では副詞としては働かないが、「ニシテ」を伴って副詞と同様に働くものであり、このグループに含めておくことにする。

(26) 私は、現憲法が環境権の行使、環境権の主張の足を引っ張ったという話は寡聞にして聞いておりません。(『第147回国会・国会会議録』)

(27) 充電と称して隠居を決め込んだ仲間が2、3年経って再度現役に復活したという例を寡聞にして私は知らない。(吉岡憲章『何歳になっても仕事を続けるための35のヒント』)

すべて、「寡聞ニシテ・・・知らない／聞いていない」など、話者が当該事項を知識として持っていないことを言う場合に用いられている。「寡聞ニシテ・・・(知ら)ナイ」で表現としての型が固定している例と捉えてよいと思われる²。

ここまで、「副詞＋ニシテ」の形式について見てきたが、用例が得られたものは、「往々ニシテ」「すでニシテ」「ようやくニシテ」「たちまちニシテ」「同様ニシテ」「当然ニシテ」「寡聞ニシテ」の7語についてであった。7語というのは決して多い数字とは言えず、現代語において「ニシテ」が副詞の語尾として用いられる用法は、限定的なものに止まっていることがわかる。共通しているのは、「ニシテ」が下接していることにより、やや硬い、古めかしい表現といった印象になることと、それぞれの副詞の持つ時間性や状態性などの意味が強調され、より描写的、説明的な表現となっていることであろう。

ここでもう一つ、「副詞＋ニシテ」に準ずるグループとしての用法を見ておきたい。「一瞬ニシテ」「一夜ニシテ」など、短時間を意味する名詞に「ニシテ」が下接する用法である。副詞ではなく名詞に「ニシテ」が接続したものではあるが、「ニシテ」を伴うことで全体として副詞と同様の働きを持つものである。以下にそれを述べる。

3.8 短時間を意味する名詞＋ニシテ

多くは「一」をその部分として含み、短い時間・期間を示す名詞に、ニシテが後接した形式の例が一定数見られた。以下に、各々得られた用例数とともに、数例ずつ例を挙げる。

<一瞬ニシテ> 256例

(28) 電子と陽電子を衝突させると、それは一瞬にして消滅して、エネルギーに転換してしまう。(立花隆『サイエンス・ナウ』)

(29) 「大蔵省を追い出された瞬間は、正直いって、目の前が真っ暗になったよ。少年の時から夢が、一瞬にして、挫折したんだからね。(西村京太郎『怒りの北陸本線』)

(30) 滝のような雨だった。飛沫が二十センチも上がろうかというほどの強い雨で、一瞬にしてみんなずぶ濡れになった。(さだまさし『精霊流し』)

<一夜ニシテ> 80例

- (31) 三代將軍の座をめぐって争った比企一族と北条一族との抗争は、こうして一夜にして呆気なく片づいてしまったのだ。(吉田憲右『古都鎌倉ミステリー旅』)
- (32) 八十余万と号された曹操軍は、一夜にして潰滅した。こうして「赤壁の戦い」は終わった。(寺尾善雄『三国志』)

<瞬時ニシテ> 30例

- (33) 現在では、世界各地で起きている事件や現象についての情報を瞬時にして入手できるようになっており、世界的に情報の共有化が進んでいる。(郵政省『通信白書(平成4年版)』)
- (34) 合わせて十余万の大軍が四つの門から城内に雪崩れこんだ。長安城は瞬時にして、一度に地震と洪水に見舞われたような大騒ぎとなる。(安能務『三国演義』)

<一日ニシテ> 23例

- (35) ローマは一日にして成らず。いい表情も一日にして成らず。できるだけ毎日自主トレしましょう。(西松眞子『魅せる技術』)
- (36) もし米軍が硫黄島や沖縄をとびこえて一気に本土上陸作戦を展開すればどうなるだろうか、おそらくは六大都市はおのおの一日にして占領されてしまうに間違いない。(沖修二『阿南惟幾伝』)

<一年ニシテ> 8例

- (37) ランファンは激怒し、一切の話し合いを拒否したため、最終的に政府は彼を解雇する決定を下した。こうして彼はわずか一年にして歴史の表舞台から消え去ったのである。(石川幹子『都市と緑地』)

<一朝ニシテ> 6例

- (38) 援助物資の払い下げ、有利な為替レート、低利融資の三つを同時に手中にすることのできたいくつかの企業は、まさに一朝にして大企業へと転身していったのである。(渡辺利夫『韓国』)

<一代ニシテ> 3例

- (39) 横浜の豪商、「天下の糸甚」こと、久米甚八。例にもれず、幕末明治の騒擾に乗り、官界財界でうまくたちまわり、一代にして身上を築いたくち。(物集高音『大東京三十五区冥都七事件』)

<一晩ニシテ> 1例

- (40) 看護婦から起こされて、「先生、たいへんですよ、あのかたが躁病になっている」
一晩にしてうつから躁に変わってしまう、そんな場合もあります。(平井富雄『ストレスと自己コントロール』)

以上はすべて、変化の時間的な速さを強調して表す表現として用いられている。特に、「一瞬ニシテ」「一夜ニシテ」などは用例数も多く、現代語において表現の型として定まっておき、生産性を有する表現パターンと言える。この、短時間を表す用法における「ニシテ」は、これまでに見た「副詞+ニシテ」に多く見られた、継続性・状態性よりも、時間の速さ・短さを強調するものとして働いている。この時間の速さ・短さの強調という点においては、この一連の用法は「たちまちニシテ」と非常に似通っている。

また、「一瞬」「一夜」「瞬時」などに下接する場合の「ニシテ」は、冒頭に挙げた二種の「ニシテ」のうちの格助詞的用法（『日本文法大辞典』の①、『日本国語大辞典』の㊦の用法）と見るのが妥当と思われる。それゆえ、「たちまちニシテ」などの「副詞+ニシテ」における「ニシテ」も同様に格助詞的用法（すなわち「ニ」は格助詞のニ）と考えるべきかと思われる。

4 ながら+ニシテ

本調査では、動詞及び数名詞に副助詞「ながら」が後続し、さらに「ニシテ」が後続して用いられる例が一定数見られた。用例として得られたのは、「生まれながらニシテ」「居ながらニシテ」「寝ながらニシテ」「立ちながらニシテ」及び「三つながらニシテ」の形式である。この章では、この「ながら+ニシテ」について考察する。

4.1 生まれながらにして

「ながら+ニシテ」の類の中では、「生まれながらニシテ」が最も多く、67例見られた。一方で、「生まれながらニ」も62例あり、用例数の上では拮抗している。

「生まれながらにして」は、(41)では「できている」、(42)では「備えている」、(43)では「病弱だった」、(44)では「囲まれて育った」などのように（波線の部分）、既定の状態性の表現と対応し、それらを修飾する表現として多く用いられている。「生まれながらニシテ」は言い換えれば「生まれた時点からすでにして」といった意味であり、3.2で見た「すでにして」との共通性も認められる。

- (41) 張叔遼の「自然好学論」というのは、儒家的発想にたつて、孔子の「学びて時に之を習う。亦た楽しからずや」を金科玉条として、人間という者は生まれながらにして学問を好むようにできているものだと論じている。(林田慎之助『人間三国志』)

- (42) その彼に彼女がいま気がかりを覚えたのは、その悠然と馬上にある姿が連枝衆の中でも格別に際立っていて、生まれながらにして人の上に立つ風格を備えているように見えたからだ。（向居直紀『女の刃』）
- (43) ショパンは幸か不幸か、生まれながらにして病弱だった。健康のため、空気がきれいな田舎で休暇を過ごす必要があったのだ。（堀内みさ『ショパン紀行』）
- (44) たとえば、米国社会はすでに、そしてまもなく日本社会にも、生まれながらにしてデジタル・メディアに囲まれて育った若者たち、つまり、「ネット・ジェネレーション」の時代が来る。（小此木啓吾『「ケータイ・ネット人間」の精神分析』）
- (45) 衣子はもとより戦争というものを知らない。生まれながらにしての平和と物質の豊かさは空気や水のように身のまわりにあった。（森村誠一『銀河鉄道殺人事件』）

なお、(45) は「生まれながらにしての平和と物質の豊かさ」と格助詞「の」を伴って体言に続く珍しい例であるが、「生まれながらの平和物質の豊かさ」のように表現することも可能であるにもかかわらず、わざわざ「生まれながらにしての……」と「ニシテ」を介在させていることで、これも「平和である（こと）」「(物質が)豊かである（こと）」といった状態性の表現に近づけているのではないだろうか。

4.2 居ながらニシテ

- (46) 中村先生は昭和三十三年に九州大学へ赴任されたが、京都へ来られると岡見家に泊られる場合が多く、私は居ながらにして先生の消息に通ずる結果となった。（谷沢永一『時代の手帖』）
- (47) 平成9年度に整備した防災対応マルチメディアモデル住宅において、家庭に居ながらにして、防災情報をはじめとする様々な情報を入手可能なシステムの実用化研究等を引き続き実実施する。（国土庁『防災白書（平成11年版）』）
- (48) しかるにその紐の売り手がみな忍者で、幸村はいながらにして全国の情勢に通じていた一という話がある。（實吉達郎『知らなきゃ怖い生物常識』）

「居ながらニシテ」は62例であった。「居ながらニ」も見られたが、1例のみであったことから、「居ながら」は「居ながらニシテ」ではほぼ固定していると見てよいであろう。ここも「居る」という状態性の濃い動詞であることが「ニシテ」のもつ状態性の表現特徴と合致していることが重要な要因となっていると考えられる。

4.3 生きながらニシテ

- (49) 甲斐姫は、山中の靈氣を一身に浴びて、大自然と一体と化し、生きながらにして無に還ることを、信綱に命ぜられたのである。(宮本昌孝『青嵐の馬』)
- (50) 魅力の魅は、魑魅魍魎の魅である。生きながらにして、すでに死者となった人の魅力である。似たような人としては、夏目漱石の小説「こゝろ」の「先生」以外には思い当たらない。(車谷長吉『武蔵丸』)

「生きながらニシテ」は17例であった。また、「生きながらに」も2例見られた。うち1例を示しておく。

- (51) ええ、そう、遠目ながらも小暗い火影に囚われの人の姿が見えます。生きながらに人を葬る墓場かしら。(岩根罔和『スペイン中世・黄金世紀文学選集』)

この(51)では、「生きながらに」は「人を葬る」にかかり、「人を生きたまま葬る」すなわち被動作主体「人」が「生きながら」であることを示す文となっている。(50)では「人」が「生きながらにして」「死者となった」という関係であり、こちらは自動性・状態性がより強く感じられる。「ニシテ」が付されていることにより、やはりこのように、微妙ではあるが意味の異なりが読み取れる。

4.4 その他の「ながら+ニシテ」

上記の「ながら+ニシテ」以外に、「寝ながらニシテ」の用例が3例、「立ちながらニシテ」の用例が1例、さらに、やや特殊な例として数名詞を用いた「三つながらニシテ」の例が1例、それぞれ見られた。「寝ながらニシテ」「立ちながらニシテ」は、いずれも「寝ている／立っている状態で同時に」といった意味で用いられており、「そのままの状態」であることが強調された表現と言える。「三つながらニシテ」は、「三つともにすべて」といった意味で用いられているもので、他の「ながら+ニシテ」とはやや趣を異にしている。漢文を擬した文体的な特徴もあるかと思われる。

- (52) 錯覚が解け、再びタイムスリップして現実に返った時、寝ながらにして聞いた母の悲恋物語が蘇った。(高山路爛『わが愛はやまず』)
- (53) 樹木も、ただ立っているではありません。立ちながらにして酸素をつくるという、大きな役割を果たしているばかりか、ほかにもきりがなほどの役にたっています。だから人間だって、かならずなにかの役にたって生きるべきです。(長田百合子『親がかわれば、子どももかわる』)

- (54) 呂布は「名馬」と「財貨」と「美女」を三つながらにして欲した。そして、そのいづれをも手に入れた果報者である。(安能務『中華帝国志』)

5 評価成分 (文副詞) としての用法

以下には、評価成分として機能している、「副詞およびナ形容詞＋ニシテ」の用法について述べる。「評価成分」は、「文副詞」「文修飾副詞」などとも呼ばれるが、工藤 (1997) では、「文の叙述内容に対する話し手の評価を表す、先行する独立的成分」を「評価成分」の定義としている。叙述内容の内部でなく外部から、評価を表すために文頭の近くに置かれる副詞的表現であり、今回の調査では、「幸いニシテ」「不幸ニシテ」「幸運ニシテ」「不運ニシテ」の実例が確認できた。評価成分の型のバリエーションとしては、「～コトニ (幸いなコトニ など)」「～ニモ／クモ (幸いニモ など)」「～ナガラ (残念ナガラ など)」がよく知られているが、本稿で問題としている「～ニシテ」の形式での評価成分はこれまでほとんど取り上げられていない。管見の限り、「～ニシテ」に触れているのは、中右 (1980)、工藤 (1997) であり、そのいずれもが、「幸いニシテ」を例として挙げるのみである。今回用例として見られたものは、「幸い／不幸／幸運／不運」であった。そのいずれも意味範疇が非常に似通っており、ニシテの型の用法の広がりは見られないものの、「～ニシテ」が評価成分 (文副詞) の一つの型として数えられることは確認できたと思う。

5.1 幸いニシテ

本調査では 113 例が得られた。

- (55) 今後海底探査をすることになる海域を大まかに一巡した。幸いにして同行の東海大学海洋学部教授工藤盛徳先生が潜水具を携えておられたので、海底の様子がどのようなかを調査していただくことにした。(茂在寅男『“海の寅さん” 人生航海記』)
- (56) 引退後、彼は幸いにして種牡馬になれた。(宗岡量雄『ミスターシービーの時代』)
- (57) 「リッツ」に行くには丸の内警察署の前を通らなければいけない。幸いにして、見とがめられることはなかったが、緊張で冷や汗が出る疎開劇だった。(村上信夫『帝国ホテル厨房物語』)

「幸い」の場合、「幸いニ」及び「幸い ϕ 」の形式でも評価成分 (文副詞) として用いられることが特徴的である。

5.2 不幸ニシテ

本調査では 111 例が得られた。「幸いニシテ」とほぼ同数である。

- (58) 回廊東壁は長さ六メートル、高さ四メートルをはかる。ここには一面に描かれ、さらに北壁へ、全長一〇メートルにわたる一大構図が展開されている。現在不幸にして北壁のほとんど半ばが流失している。(岡崎敬『シルクロードと朝鮮半島の考古学』)
- (59) 不幸にして関ヶ原ノ戦いは、西軍が負けた。しかし不幸中のさいわいは、秀頼は、一いっさい無関係の位置にいた。ということで、天下の権をうばわれただけで命はたすけられた。(司馬遼太郎『城塞』)
- (60) 大半の母親は、そうやって日常に戻り、子育て期をやりすごしていく。だが、不幸にして蓄えたエネルギーが、子どもと一対一で向きあっているときにキレてしまったらどうなるのだろう。そんな瞬間は、現代の親ならば誰しも経験している。(品田知美『<子育て法>革命』)

「不幸」の場合は、「不幸ニ」「不幸 ϕ 」の形式での評価成分(文副詞)の用法は見られない。

5.3 幸運ニシテ

本調査では4例が見られた。「幸い」と類義ではあるが、こちらは「ニシテ」を下接して用いられることは少ないようである。

- (61) 幸運にして武器を持って戦う必要のない社会に生まれ育った私には、「命を無駄にするな」、と単純にノゲには言えない。(宇田有三『過酷な世界の天使たち』)
- (62) 鳥類と爬虫類の中間的な化石は、幸運にして始祖鳥なるものが発見されているが、南ドイツのバイエルン地方で六点発見されているにすぎない。(山本健一『脳とこころ』)
- (63) 有名な属の多くは北アメリカ産のもので、特に非常に豊富な発見がなされたのはカナダのものである。幸運にして最も有名な標本の二つが、サウス・ケンシントンの大英博物館の古生物学部にある。(W・E・スウィントン：著/小島郁生：訳『恐竜』)

5.4 不運ニシテ

本調査では1例のみ見られた。

- (64) 不運にして戦に敗れた。予がもう少し若ければ、造作なく勝っていたものを。この愚劣な結果が天の命なら、天なぞ要らぬ。(芝豪『大公望』)

以上5.1～5.4で見てきたような評価成分の「ニシテ」は、叙述Pについて評価Xがなされる場合に、「PハXデアル」の主述関係が成り立つ上において、「XニシテP」と表現するものである、とすることができる。その意味において、「Xニシテ」は述語性を帯びる。この場合、評価成分で用いられる「ニシテ」は、本稿冒頭に挙げた「ニ

シテ」二種のうちの助動詞的用法と見るのが自然であり、先に触れた「一夜ニシテ」「瞬時ニシテ」「たちまちニシテ」などの用法が格助詞的用法であるとすれば、これらの用法の間には文法的な異なりがあるということになる。この点については、歴史的考察も踏まえた形で別稿に譲ることとしたい。

また、評価成分には「幸運にも」「幸運なことに」など、評価成分マーカーとも言うべき、評価成分であることを特徴づける「部分要素」が含まれることが多い³。「ニシテ」もそのようなマーカーの一つととらえることができよう。特に、「不幸ニシテ」の場合は、「不幸ニ」「不幸ゆ」の形式で評価成分、文副詞として用いられることがなく、もっぱら「不幸ニシテ」の形式で現れる。その用例数も111例と今回の調査の中では比較的多数であった。下接する助辞が「ニシテ」であることで、評価成分としての働きを形式面から保っている、そのような用法と見ることができる。

6 まとめ

今回の調査では、「ニシテ」の副詞語尾用法として、「副詞＋ニシテ」、「短時間を意味する名詞＋ニシテ」、「ながら＋ニシテ」、評価成分としての「ニシテ」の用例が観察された。それぞれ種別ごとの用例および用例数を表1にまとめておく。

【表1】副詞語尾的用法の「ニシテ」

類別	用例	用例数
副詞＋ニシテ	往々ニシテ	268
	すでニシテ	42
	ようやくニシテ	28
	たちまちニシテ	47
	当然ニシテ	4
	同様ニシテ	38
	寡聞ニシテ	13
短時間を意味する 名詞＋ニシテ	一瞬ニシテ	256
	一夜ニシテ	80
	瞬時ニシテ	30
	一日ニシテ	23
	一年ニシテ	8
	一朝ニシテ	6
	一代ニシテ	3
ながら＋ニシテ	一晩ニシテ	1
	生まれながらニシテ	67
	居ながらニシテ	62
	生きながらニシテ	17
	寝ながらニシテ	3
	立ちながらニシテ	1
評価成分としての 用法	三つながらニシテ	1
	幸いニシテ	113
	不幸ニシテ	111
	幸運ニシテ	4
	不運ニシテ	1

「ニシテ」は、現代語においては用法のバリエーションが多いものとは言えない。その原因は、ニシテ用法の成り立ちあるいはその歴史的発展とかかわっているものと推察される。今後は、史的観点からも、「ニシテ」の意味・用法を探っていきたいと考える。また、それと合わせて、「一瞬ニシテ」「一夜ニシテ」などに見られる時間を表す名詞と副詞との関連・連続性や、評価成分としての「ニシテ」の意味用法および文法的側面などから、副詞語尾の「ニシテ」、特に「ニ」の意味機能について、現代語の用法においても検討すべき点が多い。文中における副詞の働きや、助詞・助動詞の体系などといった観点から非常に興味深い問題であり、今後、考察を進めたいと考えている。

注

- 1 DVDによるオフライン版「中納言」、およびインターネットによるオンライン版「少納言」(<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>)を使用。
- 2 今回の調査対象には見られなかったものであるが、毎日新聞の用例に、類似の表現と思われるものが散見されたので、挙げておくことにする。いずれも、「これまで知識がなかった」ことを表現しており、「不覚にして」「うかつにして」による修飾が見られる。
「世紀をひらく 原子の火」――。茨城県民の歌3番、冒頭の歌詞が目に飛び込んできた。初めて買った「茨城県民手帳」を何気なくめくると、最初に五線譜付きで紹介されている。10年秋に静岡県から転勤してきたが、不覚にして我が県民の歌を初めて知った。(2012.02.16 地方版/茨城)
日々、何気なく吸うフィルターつきのたばこ。一本一本に印字されているはずの4けたの数字が煙のように消えていた。10月中旬から出回っている。デザイン的に無粋だったからという。うかつにして気がつかなかった。(1999.12.09 大阪夕刊)
- 3 澤田(1993)、西川(1998)などに評価成分を示す「マーカー」についての言及がある。

参考文献

- 青木伶子(1977)「いわゆる副詞語尾の『に』について－格助詞の下位分類に及ぶ－」『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』, 明治書院, pp.949-968.
- 工藤 浩(1997)「評価成分をめぐって」川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』, ひつじ書房, pp.55-72.
- 小矢野哲夫(1983)「副詞の呼応－誘導副詞と誘導形の一例－」渡辺実編『副用語の研究』, 明治書院, pp.216-232.
- 澤田治美(1993)『視点と主観性－日英語助動詞の分析－』, ひつじ書房.
- 鈴木 泰(1997)「指定辞トシテ、ニシテの句格」『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』, 明治書院, pp.347-365.
- 中右実(1980)「文副詞の比較」『日英語比較講座第2巻文法』, 大修館書店, pp.157-219.

- 西川真理子（1998）「『も』型評価的文副詞の出現と発展について」『甲子園大学紀要 栄養学部編』No.26（A），甲子園大学紀要編集委員会編，pp.115-119.
- （1999）「日本語の評価的文副詞－『も型』と『ことに型』」『甲子園大学紀要 栄養学部編』No.27（A），甲子園大学紀要編集委員会編，pp.41-53.
- （2001）「日本語の評価的文副詞の『も』の機能について」『甲子園大学紀要 栄養学部編』No.29（A），甲子園大学紀要編集委員会編，pp.63-77.
- （2002）「『ことに型』評価的文副詞の『に』をめぐって」『甲子園大学紀要 栄養学部編』No.30（A），甲子園大学紀要編集委員会編，pp.49-59.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典 第二版』，小学館.
- 松村明編（1971）『日本文法大辞典』，明治書院.
- 谷部弘子（1986）「話し手の評価を担う形容詞」，『日本語学』第5巻11号，pp.64-75.
- 渡辺 実（1971）『国語構文論』，塙書房.

